

# 『封神演義』の仏教系人物について

二階堂 善 弘

Some Buddhist Characters in *Fengshen Yanyi*

NIKAIDO Yoshihiro

## Abstract:

This report reviews the Buddhist lineage of characters that appear in *Fengshen Yanyi*. Based on my research, Mojia Sijiang originates from the Buddhist Four Heavenly Kings, Hen Ha Erjiang originates from the Vajrapānis, Randeng Daoren originates from Dipankara Buddha, Jieyin Daoren originates from Amitābha Buddha, Wenshu Guanfa Tianzun originates from Bodhisattva Mañjuśrī, Puxian Zhenren originates from Bodhisattva Samantabhadra, Cihai Daoren originates from the Bodhisattva Avalokiteśvara, and Wei Hu originates from Skanda. I found that most Buddhist characters are based on *Shenxian Tongjian*.

Keywords: Buddhas, Bodhisattvas, Taoism, Esoteric Buddhism, Folk beliefs

キーワード：仏、菩薩、道教、密教、民間信仰

## 前 言

『封神演義』では、仏教系の登場人物は、ほぼ「西方教」に関連する人物として扱われている。ただ、そういった人物も、道教的な称号に変改されている者が大半である。たとえば、阿弥陀仏にあたる接引道人、準提菩薩に由来する準提道人などは、道人の号で表される。普賢真人、文殊広法天尊、慈航道人などの菩薩も、それぞれ真人号、道人号、天尊号で呼ばれる。これは意図的に、小説自体から仏教色を薄めようとしたものと考えられる。しかしながら、結局はその意図とは裏腹に、多くの仏教に関連する人物を登場させて、むしろ仏教の影響を強く打ち出すことになってしまった。

これは、『封神演義』が基づいたであろう『武王伐紂平話』と、かなり性格が異なるものである。『武王伐紂平話』は、当時の民間信仰の影響は強く出ているものの、仏教や道教の要素は薄い。

本論では、『封神演義』に登場する仏教関連の人物について検討し、その形成について見てみたい<sup>1)</sup>。

---

1) 本論では、『封神演義』の引用については、筆者監訳本（二階堂・山下・中塚・二ノ宮 2017-2018年）を用いた。

## 1. 魔家四将と哼哈二将

『封神演義』では、仏教系の人物は、西方教に帰依し、そのまま西方に身を移す者が多い。ところが、明らかに仏教系の由来であるにもかかわらず、封神されてしまう者もある。この差については、実のところ、『封神演義』の作者たちには深い考えはないのかもしれない。とはいえ、その不統一については、気になる面もある。

魔家四将と哼哈二将は、日本の仏寺でも祀られる四天王と仁王に当たるものである。しかしながら、彼らは明確に仏教系の神であるにもかかわらず、封神されてしまう。

魔家四将、すなわち魔礼青、魔礼紅、魔礼海、魔礼寿の四名は、第九十九回で次のように封神される<sup>2)</sup>。

増長天王—魔礼青、青雲宝剣一口を携え、風を掌る  
広目天王—魔礼紅、碧玉琵琶一面を携え、調を掌る  
多文天王—魔礼海、混元珍珠傘を携え、雨を掌る  
持国天王—魔礼寿、紫金龍花孤貂を携え、順を掌る

また哼哈二将、すなわち鄭倫と陳奇の二将は、次のように封神される<sup>3)</sup>。

今、太上元始の勅命を奉る。なんじ鄭倫、紂を棄て周に帰し、まさに良臣の主を得るを寿ぐ。督糧に尽瘁し、深く長駆の労苦に勤めるも、いまだ一命の榮を受けずして、陽九の厄に罹る。なんじ陳奇、弔伐の師を阻み天命に違えども、国に忠節を尽くし、まことに嘉すべし。総べて劫運に帰するも、深嗟は無用なり。茲に特になんじら腹内の奇に即して、ここに位職を加え、勅によりなんじらを哼哈二将の神に封じる。西積山門を鎮守し、宣布教化し、宝器を保護せよ。

ここでは、明確に「西積山門を鎮守」といい、寺院の山門を守護する者であると宣言されている。

哼哈二将は、かつて金剛殿に祀られていた金剛力士が源流であると考えられる。金剛力士像、すなわち仁王像は、日本の寺院では、阿形像、吽形像のふたつがあるとされる。二十八部衆を祀る場合は、那羅延堅固、密迹金剛と呼ばれる<sup>4)</sup>。

現在の中国の寺院では、本殿である大雄宝殿の前に天王殿があり、そこに四天王と弥勒菩薩、それに韋駄天が置かれるのが一般的である。現在の中国の寺院では少なくなっているが、大雄宝殿、天王殿の前に、金剛殿を据えるところもある<sup>5)</sup>。

この天王殿に、ともに祭祀される四天王である魔家四将は封神されるのに、韋駄天に当たる韋護は封

2) 筆者監訳本第4巻(二階堂・山下・中塚・二ノ宮 2017-2018: 443)から引用。

3) 筆者監訳本第4巻(二階堂・山下・中塚・二ノ宮 2017-2018: 443)から引用。

4) 二十八部衆と二十諸天については、二階堂(2019: 135-145)を参照。

5) このことについては、二階堂(2016: 197-206)を参照。

神されない。

明刊本『封神演義』のなかでは、第九十九回において封神される者の大半は物語に登場せず、かなりの齟齬が存在する。これが『封神演義』が段階を経て形成されていったことに起因するものであることは、すでに指摘されている<sup>6)</sup>。哪吒三兄弟、李靖、楊戩、韋護などの「肉身にて聖となった」者たちは、雷震子を除いては、『封神演義』の形成において、後に加わった人物であると推察される。この点で、韋護はまた例外として扱うべきかもしれない。

実は『封神演義』のなかでも、魔家四将の持つ宝器については、一定していない。第四十回では、黄飛虎が魔家四将について説明する<sup>7)</sup>。

佳夢関の魔家四将は四人兄弟です。四人全員が道士から奇怪な術を伝授されており、まことに強敵です。長男は魔礼青といい、身長は二尺四丈。顔は蟹に似ており、鬚は銅線のようなものです。長槍の使い手で、馬には乗らず徒歩のまま戦います。秘伝の宝剣は青雲剣といい、剣には『地・水・火・風』の四字が記された符印が刻まれております。この風は黒風で、風に吹かれると万千もの戈矛に襲われ、刃で身体はバラバラにされてしまいます。火は、空中を金蛇が這い、地上を覆う黒煙のようです。その煙は人の目を塞ぎ、火焰は身体を焼き、逃れようがありません。魔礼紅は混元傘という傘を使います。傘は祖母録・祖母印・祖母碧・夜明珠・碧塵珠・碧火珠・碧水珠・消涼珠・九曲珠・定顔珠・定風珠、さらに『装・載・乾・坤』の四字が刻まれた珠で飾られております。この傘は開かせてはなりません。もし傘が開くと天地は闇に覆われ、日月は光を失い、瞬く間に乾坤が不安定になります。また、魔礼海は槍を使い、琵琶を背負っております。琵琶は四弦で、やはり『地・水・火・風』を操ります。弦をはじくと、青雲剣のごとく風火が襲いかかります。さらに魔礼寿は二本の鞭の使い手です。袋の中には花狐貂という白鼠のような物があります。これを空中に放つと、白象のように巨大になり羽が生え空を飛び、周囲の人間を喰らいつくします。この四将が西岐討伐に来たのであれば、わが軍が勝つ見込みは非常に少ないです。

第四十回と、第九十九回では、魔礼紅と魔礼海の持つ宝器が入れかわっている。『封神演義』の作者たちは、小説自体には疎かな部分が多いにもかかわらず、こういった宝器の設定には、いやに凝った描写を行う。

そして、この宝器は、現在の寺院でよく見られる四天王の持ち物とも異なっている。現在、中国の寺院で一般的に見かける四天王像の持ち物は、次の通りである。

多聞天、宝傘

広目天、蛇、または龍

持国天、琵琶

6) 『封神演義』の封神表と、物語の間に矛盾が多いことについては、尾崎（2023）が詳しく指摘している。

7) 筆者監訳本第2巻（二階堂・山下・中塚・二ノ宮 2017-2018：283-284）から引用。

## 増長天、宝剣

これについては、現在の韓国の寺院についてもほぼ同じようになっている。これらの変遷については、筆者も含め、すでに考察がある<sup>8)</sup>。現在の中国の寺院の四天王について、筆者はかつて次のように紹介した<sup>9)</sup>。

中国の四天王像は、東方持国天が手に琵琶を持ち、増長天は手に宝剣を持ち、広目天は手に蛇を持ち、多聞天は手に傘を持っているのが一般的である。また、天王殿の両側に二体ずつ、中を向いて坐す形が多い。この四天王の形象は、細かな差異があるものの、五台山や普陀山・天台山・九華山などの名山の諸寺、また北京や上海や杭州など都市部の寺廟においてもほぼ同じ形象となっている。

琵琶や傘を持つ四天王の像の古いものとしては、北京居庸関雲台にある元代のレリーフがある。持国天が琵琶、増長天が剣、広目天が蛇、多聞天が傘と銀のネズミを持つ。この組みあわせは、ほぼ今の寺院で見られるものと変わらない。

そうすると、やはり誤っているのは『封神演義』の作者たちということになる。二丈四尺などという身長も、実際に寺院にある四天王像を見て、そのまま書いているのであろう。ただ、おそらくは四天王の誰が何を持つのかについては、認識していないのだ。そして、うる覚えであるために、回によって不統一があるのだろう。

また花狐貂については、広目天の持つ蛇なのか、それとも、多聞天の持つネズミであるのかも、判然としない。

『西遊記』にも四天王は登場するが、これも、やや不可解なあり方となっている。

孫悟空が天界で暴れる時、また天界に助けを求める時、多くの場合、四天王が登場する。ただ、天界の武将の司令となっているのは、だいたい李天王と哪吒太子である。

李天王は宝塔を持っており、本来は多聞天と重なるはずであるが、ほぼその地位は、帝釈天に等しいものとなっている。すなわち、四天王を率いる上位者となっている。

『封神演義』では、李天王は李靖となっているので、魔家四将とは、全然縁のない人物と化している。

『西遊記』の四天王は、玉皇大帝の凌霄宝殿を守る将としての役割が強い。配下に、温元帥、趙元帥、馬元帥、関元帥などの元帥神がある。『西遊記』第十六回には、南天門の広目天王の配下に、龐天君、劉天君、苟天君、畢天君、温元帥、馬元帥、関元帥、趙元帥が控えているとの記載がある。

『西遊記』では、本来の仏教系の諸神は、ほぼ天竺にあって釈迦如来を守護している。しかし、四天王は明確に玉皇大帝を守護する役割となっている。そうすると、『西遊記』の考え方では、四天王は、ほぼ道教系の神としての扱いと考えられる。要するに、元帥神の上位者といった認識である。

8) これについては、筆者の考察（二階堂 2009：155-171）、及び朴氏らの考察（朴銀卿、韓政鎬著、金立言 2013：189-213）を参照のこと。

9) 筆者著作（二階堂 2009：159）より引用。

この考え方を、『封神演義』の作者たちが踏襲している可能性はある。そうすると、四天王にあたる魔家四将が封神されるのは、それほど不思議ではないのかもしれない。

## 2. 燃灯道人・接引道人など

『封神演義』の作者たちは、仏と菩薩の違いも、あまり気にとめていないように思える。そのためか、仏も菩薩も、ほぼ同列の状態扱われている。

仏にあたるのは、阿弥陀如来である接引道人、燃灯仏である燃灯道人、俱留孫仏である懼留孫となる。当然ながら、『封神演義』には、釈迦牟尼仏は登場しない<sup>10)</sup>。

一応は意識して、釈迦牟尼仏以前の仏を登場させているように思える。燃灯仏は、燃灯古仏とも称せられるように、過去世において釈迦牟尼仏に授記を行った仏として知られている。燃灯道人は、『封神演義』の物語においては、常に釈迦如来の代役ともいべき役割をはたしている。第十四回で哪吒を降すための宝塔を李靖に与えたのは燃灯道人であるが、これは『西遊記』などでは、釈迦如来の役目となっている。第四十三回から展開される十絶陣の戦いにおいては、十二仙をまとめる上位者として登場する。そもそも、その仙洞は靈鷲山である。

さすがに、よく時代を無視する『封神演義』の作者たちでも、釈迦牟尼仏がまだ誕生していないことは認識していたようで、代わりに「それ以前の仏」であった燃灯道人に、その役割を押しつけているものと思われる。

とはいえ、なぜ燃灯仏なのかという疑問は生ずる。

燃灯仏は、中国の寺院でも、日本の寺院でも、その仏像が祭祀されているのを見ることは少ない。ただ、中国の北方の寺院では、仏塔である「燃灯塔」はよく見かける存在である。北京の東、通州にある燃灯塔が特に有名である。

また、遼の時代の仏像が残る山西大同の華嚴寺の薄伽教蔵殿には、三世仏のひとつとして燃灯仏が祀られている。

燃灯仏は、別の号としては定光仏がある。この定光仏は、しばしば民間信仰においては、転生とされる人物が出現している<sup>11)</sup>。

燃灯仏の転生について、もうひとつ想起されるのが、『三宝太監西洋記』である。『三宝太監西洋記』は、明の羅懋登が書いた小説で、ほぼ『封神演義』と同時代に書かれたものである。そのため、描かれた宗教文化については、共通するところも多く見られる<sup>12)</sup>。

『三宝太監西洋記』は明の鄭和の航海を主題にしており、主人公は鄭和となっている。しかし、実際には鄭和はあまり表に出てこない。航海の途中に現れる妖術使いなどを打ち破っていく話に主眼が置かれ

10) 西方の教主たちについては、山下一夫氏の論文（山下 1999：241-259）を参照のこと。

11) 定光仏の転生については、永井政之氏の論文（永井 1998：57-90）および、山下一夫氏の論文（山下 1997：39-61）を参照のこと。

12) 『三宝太監西洋記』については、筆者論文（二階堂 1994：242-267）を参照。

ており、活躍するのは、道教を代表する張天師と、仏教を代表する碧峰長老となっている。

この碧峰長老こそが、燃灯仏の化身であり、物語全体において活躍する。また、明の永楽帝が登場するが、これも道教の玄天上帝が下界に降ってきているものである。

『三宝太監西洋記』の第四十四回には、哪吒太子が登場する<sup>13)</sup>。

右手にまたひとりの神将が現れました。身長は三丈六尺で、三個の頭、六本の手、六個の眼、六種の武器を持っております。燃灯仏の方を向いて挨拶いたします。その神の言いますには、「小神は哪吒太子であります。釈迦牟尼仏の命によりまして、特にここへ来たったものです」。

この哪吒太子の形象は、『西遊記』などに見られるものと同じで、『封神演義』の流行する以前の姿となっている。『三宝太監西洋記』には、ほとんど『封神演義』の影響は見られない。

ただ、『封神演義』、『三宝太監西洋記』の双方において、燃灯仏が重要な役割で登場するということが、当時の燃灯仏の民間信仰における地位を示すものと考えられる。

接引道人、すなわち阿弥陀仏については、昔も今も、中国でも日本でもさかんに祭祀される仏であり、『封神演義』に登場することについても、特に問題はない。いまでも、お坊さんが挨拶するときは、「南無阿弥陀仏」が使われている。

ただ、通俗小説や戯曲において阿弥陀仏はそこまで目立つ仏ではない。『西遊記』でも、仏といえば釈迦如来ばかりが活躍することになっている。

さらに、もっと不明なのが俱留孫仏を登場させたことである。

俱留孫仏は、もはや天尊号も、道人号も加えることなく、ただ懼留孫という名前のみで登場する。かなり乱雑な扱いである。ただ、物語中では土行孫の師であったり、かなり重要な役割であったりする。

俱留孫仏であるが、おそらく燃灯仏と同様に、ただ単に釈迦牟尼仏以前の仏、ということで登場しているのだと考える。俱留孫仏は、所謂「過去七仏」のなかでも、「賢劫第一」の仏であるとされる<sup>14)</sup>。

### 3. 文殊・普賢・慈航など

『封神演義』では、諸菩薩のうち、文殊菩薩が文殊広法天尊、普賢菩薩が普賢真人、観音菩薩が慈航道人として登場することは、その名称からしても明らかである。また作者たちは、かなり雑に天尊号や真人号を割り振った感がある。

本来、道教の号であれば、むしろ仏にあたる接引道人などに天尊号を割り振るべきであろう。しかし残念ながら、『封神演義』の作者たちは、道教に関する知識に乏しかったため、そこまで考えが及ばなかったものと推察される。

もうひとつ登場するのが、西方教の有力者である準提道人である。すなわち、准胝菩薩である。文殊、

13) 前掲筆者論文（二階堂 1994：260）を参照。

14) これについては、竹本寿光氏の論文（竹本 1979：297-299）などを参照。

普賢、観音ときて、ここで地蔵菩薩を登場させず、かえって准胝菩薩を出してくるのは、どうにも不可解である。

文殊広法天尊の弟子となっているのは哪吒の兄の金吒である。また普賢真人は木吒の師となっている。『西遊記』では、木叉が観音菩薩の弟子であり、君吒は釈迦如来のもとで護法の役職にあると述べられている<sup>15)</sup>。本来であれば、木吒は慈航道人の弟子で、金吒は燃灯道人の配下であるべきであろうが、おそらくこれは意図的に、『封神演義』の作者は設定を変更してきているのであろう。

文殊広法天尊、普賢真人、慈航道人の特に目立つ場面としては、『封神演義』第四十三回から始まる十絶陣の段、それと、第八十三回において、截教の仙人を降して騎獣とする段であろう。第八十三回では、文殊、普賢、慈航のそれぞれが、騎獣を得る場面を次のように描く<sup>16)</sup>。

すると虬首仙は頭を二度ほど振り、ごろりと転げると青毛獅子の姿に戻った。尻尾と頭を振る様は、はなはだ雄々しい。南極仙翁が戻り元始天尊に復命すると、元始は指示する。「文殊広法天尊の騎獣にせよ」さらに青毛獅子の首から札を下げ、表に虬首仙の諱を書き付ける。(略)老子は南極仙翁に「すみやかに靈牙仙の原身を現せ」と命じ、南極仙翁は拝命すると三宝玉如意で靈牙仙を数回叩く。靈牙仙はごろりと転げると元の姿を現し、一頭の白象になる。老子は白象の首にも靈牙仙の諱を書いた札を掛け、普賢真人の騎獣とするよう指示すると陣前に戻る。(略)金光仙は逃れられないと悟ると、ごろりと転げると元の姿を現し金毛吼に変わった。仙翁が蘆蓬殿に戻り復命すると、元始は言いつける。「やつの首にも札を掛け、その諱を書いておけ。慈航の騎獣とするのじゃ」仙翁は指示に従い、慈航は金毛吼に跨ると陣前に戻った。

すなわち、文殊広法天尊は青毛獅子に乗り、普賢真人は白象に乗り、慈航道人は金毛吼に乗る。日本や中国の寺院においても、文殊菩薩が獅子に乗り、普賢菩薩が象に乗る姿は、よく見かけるものとなっている。ただ、観音菩薩が金毛吼に乗る像は、日本では一般的ではないと思われる。中国でも、現在の寺院では見かけることが少ないが、明代にはよく見られる像であったと思われる<sup>17)</sup>。『封神演義』は、この明朝での状況を反映するものであろう。

地蔵菩薩とその騎獣が『封神演義』に登場しないことについては、その理由が不明確である。『西遊記』を見ても、騎獣である諦聴に乗る地蔵菩薩の姿は、よく知られていたと考えられるからである。

#### 4. 『神仙通鑑』との関連

『封神演義』の作者たちの教養レベルは、それほど高いものではない。道教経典や仏教経典について

15) 『西遊記』第八十三回。また金吒の名は、『西遊記』の明代の版本では君吒となっている。清代の版本は、『封神演義』の影響で金吒に書き換えている。

16) 筆者監訳本第4巻（二階堂・山下・中塚・二ノ宮 2017-2018：141-145）から引用。

17) 実際の例については、李静杰氏の論文（李 2022：4-19）を参照のこと。

は、ほとんど実際に参照しているようには思えず、通俗小説や、類書からの間接の利用に留まっているものと推察される<sup>18)</sup>。

そのため、仏教系の人物についても、おそらくは類書、通俗小説がその根拠となっていると考えられる。

衛聚賢氏の指摘によれば、『封神演義』と『神仙通鑑』には共通している記載が多いという。その点に注意して考えてみたい<sup>19)</sup>。

まず、『神仙通鑑』巻七第一節には、次のような文章がある<sup>20)</sup>。

西方諸仏が辞去しようとした。そこで、慈航、文殊、普賢の三大士もまた諸仏に従って随行することとした。

『神仙通鑑』では、このように観音を慈航大士と称しており、そして文殊、普賢とともに、「三大士」というくくりで扱うことが多い。むろん、『神仙通鑑』でも地蔵菩薩は重要な役割で登場するが、なぜか「三大士」という形にこだわっており、そこには地蔵は加えない。地蔵が登場しても、三大士の前後に現れることが多い。『封神演義』の作者たちは、このような『神仙通鑑』の姿勢を踏襲して、地蔵を出さないのかもしれない。

また、慈航道人については、次のような記載が『神仙通鑑』巻五第四節にある<sup>21)</sup>。

南海にいたると、普陀落迦巖に潮音洞という洞があり、そこにひとりの女性道士が住んでいるとのことであった。伝承では、殷の時代から、ここで修行していたとのことである。神通三昧力を得ており、あまねく世間の人々を救いたいと願っていた。そして丹薬と甘露水をもって人々を救済し、そのために南海の人々は、これを慈航大士と称していた。

道士として修行していた者が、のちに仏道に帰依して菩薩となる、という話の原型が、ここに示されている。『封神演義』の作者たちは、この話を援用して、仏教系の登場人物の辻褄を合わせたものと推察される。

また、『神仙通鑑』巻十五第三節には、普陀山、五台山、峨眉山、九華山の、所謂「四大名山」について記録する<sup>22)</sup>。

そこでは、普陀山に観音菩薩があり、弟子には善財童子、龍女などがあり、そして、「大生尊者木叱」

18) この確認のため、関西大学アジア・オープンリサーチセンター所蔵のデータベース『中国基本古籍庫』を検索して調査している。

19) 衛聚賢の説については、著書(衛 1960)を参照のこと。また『封神演義』と『神仙通鑑』の関係については、筆者論文(二階堂 2020: 325-336)を参照。

20) この段は、『中国民間信仰資料彙編』(王・李 1989: 1147-1149)から引用。衛聚賢の著書(衛 1960: 122)に拠る。

21) この段は、『中国民間信仰資料彙編』(王・李 1989: 890)から引用。衛聚賢の著書(衛 1960: 121-122)に拠る。

22) この段は、『中国民間信仰資料彙編』(王・李 1989: 2486-2487)に拠る。



「震威靈神金毛吼」の名も見えている。

五台山の箇所には、文殊菩薩があり、その下に「大華尊者金叱」「断疑靈神青獅」の名が見えている。峨眉山には、普賢菩薩があり、その下に「導視靈神白象」の名が見えている。

木吒だけが、観音から普賢の配下に移されているが、そのほかは、ほぼ『封神演義』と共通している。すなわち、『神仙通鑑』には観音菩薩の下に金毛吼、文殊菩薩の下に青獅、普賢菩薩の下に白象とあり、これもおそらく影響関係があるものと推察される。

そして、『神仙通鑑』の巻十五第四節の記載は特に重要であると考え<sup>23)</sup>。

西方の仏菩薩たちがやってくると、木公が自ら迎えに出る。慈雲が起こり、宝蓋が高くかかげられる。前に行くのは、護法の役割の関帝である。中心には諸仏と菩薩たちが行くところ、両脇は四天王、密跡金剛、哼哈二将、韋馱天などの諸天が固める。そのあとには仏菩薩が続く。地藏、三大士、弥勒、薬師、接引、準提、勢至、定光、普照王、十大弟子、二十諸天、十八尊者などである。

すなわち、この箇所には、「哼哈二将」「三大士」「接引」「準提」という名称が見えている。「慈航」の称も合わせて、『封神演義』の作者たちが、『神仙通鑑』あるいは類似の資料に基づいて製作を行ったのは間違いないと考えられる。そして、なぜ「阿弥陀」ではなく「接引」を、「准胝」ではなく「準提」を用いたかについても、この記載から理解されよう。

また『神仙通鑑』の作者は、この記述における仏と菩薩の区分については理解していたと考えられるが、『封神演義』の作者は、そこまで教養を持ち合わせていない。そこで、道号を付ける場合も、仏と菩薩、天尊と道人と真人の違いを理解せずに行ったものと思われる。

## 5. その他の人物

補足として、いくつか関連する人物についても、若干の考察を加えたい。

韋護が韋馱天を源流とするものであることは、その名称からも、また持つ宝器が「降魔杵」であることから看取できる。

『封神演義』第五十九回において、韋護は自らこう述べている<sup>24)</sup>。

師叔、わたしは金庭山玉屋洞の道行天尊の門人の韋護です。今、師命を奉じて師叔の助けに参りました。こちらに来る途中で呂岳に遇って一戦交え、わたしの降魔杵で道者を一人殺しましたが、名前は解りません。呂岳は逃げました。

道行天尊の弟子で、降魔杵を使うことが強調されている。このときに敵対することになった呂岳も、三

23) この段は、『中国民間信仰資料彙編』（王・李 1989：2500）に拠る。

24) 筆者監訳本第3巻（二階堂・山下・中塚・二ノ宮 2017-2018：162）から引用。

眼に六本の腕と、密教の神のような形象を持つが、これはすでに中華の民間信仰神の姿に変わってしまったものであり、仏教の要素はだいぶ薄れている。

『神仙通鑑』卷十一第九節に、慈航、文殊、普賢の三大士が登場したあと、続いて韋馱天も現れる段がある<sup>25)</sup>。

そこに一人の武人が現れた。身を甲冑に貫き、降魔杵を横たえて臂の上に置き、合掌して胸に当てている。その者の言うには、「仏の命を奉じて参上いたしました」とのこと。これを迎えた燃灯仏が述べる。「この子は、幼いころから修行を重ねた者で、名を韋馱という。わしに従って仏道を学び、天王の位を得た。よく一日に三州を巡ることができ、声に応じてすぐに現れることができる。その法力は無辺であり、もって三州感應護法尊天と称するがよい」。これを聞いた者たちは、口々に「よきかな」と称した。

ここでは燃灯仏が登場して述べる。『神仙通鑑』では、燃灯仏は西方のリーダーとしての役割を果たすことが多い。

もっとも、『封神演義』における韋護は、共通するのは宝器くらいであって、韋馱天の性格が強く反映されているわけではない。

『神仙通鑑』でも、「名を韋馱」というくらい、韋馱天については、著しく中華化が行われていると考えられる。これは李天王とよく似ている。

李天王も、もとは毘沙門天であったはずが、唐の將軍李靖と同一視され、そのあとは、むしろ毘沙門天との分離が進み、完全に別の神となったものである。本来毘沙門天が持っていた宝塔は、いまは李天王が持ち、そして毘沙門天は傘を持つ姿に変わるといふ、逆転現象が起きている。

韋馱天も、やはり唐代の人物であった韋琨との混同があるとされる。『法苑珠林』卷十に、次のような一段がある<sup>26)</sup>。

また天人の韋琨があり、これは南天王八大將軍の臣下である。四天王には合わせて三十二の將があり、この韋將軍が首座となる。

もちろん、韋馱天の源流はヒンドゥーの神であるスカンダ神（塞建陀）である。いまは、中国の寺院では、四天王、弥勒とともに天王殿を守護する役割で、必ず置かれるものとなっている。しかし、いまの像は中華系の武人の装束であり、スカンダ神の影響は驚くほど少ない形である。

孔宣もまた、西方と縁のある者として登場する。『封神演義』第七十一回において、孔宣は準提道人によって調伏させられ、孔雀である正体を現す。おそらくは、孔雀明王を源流とするものと思われる<sup>27)</sup>。

25) この段は、『中国民間信仰資料彙編』（王・李 1989：1953）に拠る。

26) 釈道世著、周叔迦・蘇晋仁校注『法苑珠林校注』（中華書局 2003年）343頁。

27) 孔雀明王の変遷については、高振宏の論著（高 2022：109-153）を参照。

ただ、孔雀明王も、現在の中華系の寺院ではその像を見ることは少ない。南宋期の石刻が多く残る四川大足の宝頂山には、大きな孔雀明王の像がある。明代であれば、こういった像がまだ多く残されていた可能性も高い。

金靈聖母もまた仏教系の人物に近いが、こちらは封神される運命となっている。『封神演義』第九十九回にて、金靈聖母は次のように斗母に封ぜられる<sup>28)</sup>。

今、太上元始の勅命を奉る。なんじ金靈聖母、道德すでに備わり、かつて百千の劫を歴るも、嗔恚の心いまだ退かず、殺戮の殃に遭う。皆みずから烈焰の中に踏み入る。あに冥数、輪廻の厄を定むるか。悔ゆるともすでに及ぶなし。されどなんじの潜修を慰め、特に勅によりなんじを封じて金闕を掌り、斗府に鎮座し、周天列宿の首にして北極紫気の尊となす。八万四千の群星悪煞は皆なんじの下命を聞く。永く坎宮斗母正神の職を果たせ。欽んで新命を承け、よくその罪を償え

問題は、斗母が仏教系の神と考えられるかということである。

いま中華系の寺院に行っても、斗母を見ることは少ない<sup>29)</sup>。斗母の源流である摩利支天は、二十諸天のなかに組み入れられており、二十諸天を祀るような大きな寺院では、像が置かれていることもある。ただ、摩利支天自体が、いまの中華系の寺院では、特に知名度の高い存在ではない。

これに比して斗母は、斗母元君とも称され、道観のなか、あるいは民間信仰の廟でもよく見かける存在である。摩利支天と斗母は、ある意味では表裏一体の神であるが、斗母のほうがはるかに知名度は高い。

また李天王や哪吒、金吒、木吒なども、その源流は、毘沙門天、那羅鳩婆、軍荼利、木叉であり、すべて仏教系の源流を持つ人物であると考えられる。しかし、『封神演義』が作られた時期においては、すべて中華化が進んでおり、仏寺で祀られることも、ほぼ行われなくなっている。

これが『封神演義』の製作時期にもそうであったかについては、やや判断が難しいところがある。筆者がかつて論じたように、『平妖伝』には、哪吒太子がいまだに仏寺で祀られていたことを示す記載がある。ただ、哪吒太子が仏教の神であったことは、当時はもう意識されていなかったようである。やや時代は遅れるが、『斬鬼伝』にも、明王が寺院で祀られていることへの違和感に関する記載がある<sup>30)</sup>。

韋馱天や四天王については、現在の寺院でも祭祀されており、また『封神演義』の作者たちも実際に寺院でその像を見ているのであろうと推察する。

しかし、哪吒太子や斗母などについては、当時においても、道教の道観、あるいは民間信仰の廟でしか見ていなかったと考える。そのため、こういった神々については、もう仏教系であるという意識はなかったと思われる。

28) 筆者監訳本第4巻（二階堂・山下・中塚・二ノ宮 2017-2018：436）から引用。

29) 摩利支天と斗母の関係については、高振宏の論著（高 2022：53-107）を参照。

30) これについては筆者の文章（二階堂 2009：14）を参照のこと。

## 結 語

『封神演義』の作者たちは、なるべく仏教の影響を少なくするように、意識的に物語の書き換えを行っているものと推察される。ただ、それでも仏教系の人物を多く登場させることになったのは、当時の宗教文化の趨勢から、行わざるをえなかったのだと考える。

また結局のところ、仏教系の登場人物の特性をあまり活かしていないように思える。

たとえば、文殊広法天尊ならば、もっと智慧に溢れた性格であってもよいと考えるし、慈航道人であれば、もっと慈悲に満ちた性格として描いてもよいと考える。しかし、慈航、普賢、文殊を、仮に崑崙の十二大仙の誰かと入れかえたとしても、ほとんど物語に変化がないであろうことは、容易に推察される。すなわち、ただ名称と持ち物を借りてきただけの存在と言ってよい。おそらく、作者たちは仏教や道教に関する知識に乏しく、もとの設定を活かすだけの力量を有していなかったのだろう。

そして、その知識は『西遊記』『神仙通鑑』などの通俗小説に拠るものであることも推察される。そのために、一般的な道教、仏教の信仰とも、やや乖離が生ずることになってしまった。

のちに『封神演義』の影響を受けた廟の像のほうが、むしろ整合性を取ろうと努力している様子がかがえる。たとえば、慈航道人を廟で見ると、その多くが女性の白衣観音の姿で作られている。『封神演義』では男性であったものが、民間信仰の伝統的な姿のほうに戻ってしまっている。この現象は仏教系の人物のみならず、雷震子などにも見られるものであるが、これについてはまた別に論じたい。

## 参考文献

1. 衛聚賢『封神榜故事探源』、説文社 1960年
2. 王秋桂・李豊楙編『中国民間信仰資料彙編』、学生書局 1989年
3. 二階堂善弘監訳『全訳封神演義』、全4巻、二階堂善弘・山下一夫・中塚亮・二ノ宮聡共訳・勉誠出版 2017-2018年
4. 高振宏『天母・武神と神禽－密教と道教・中国文学之交渉』、新文豊出版公司 2022年
5. 二階堂善弘『明清期における武神と神仙の発展』、関西大学出版部（関西大学東西学術研究所研究叢刊29）2009年
6. 二階堂善弘「大雄宝殿考」、『東アジア文化交渉研究（関西大学東アジア文化研究科）』第9号、2016年、197-206頁
7. 二階堂善弘「『神仙通鑑』と『封神演義』の関係について」、『東アジア文化交渉研究（関西大学東アジア文化研究科）』第13号、2020年、325-336頁
8. 二階堂善弘「二十四諸天における仏道習合について」、『日本中国学会報』第71集、2019年、135-145頁
9. 二階堂善弘「『三宝太監西洋記』への他小説の影響」、道教文化研究会編『道教文化への展望』、平河出版社、1994年、242-267頁。
10. 尾崎勤「『封神演義』の改作について」、『日本中国学会報』第75集、2023年、137-151頁
11. 朴銀卿、韓政鎬著、金立言訳「四天王像の配置形式における変化原理と朝鮮時代の四天王の名称」、『美術研究』第409号、国立文化財機構東京文化財研究所、2013年、189-213頁
12. 永井政之「中国仏教成立の一側面－定光仏信仰の成立と展開－」、『駒澤大学佛教学部論集』第29号、1998年、57-90頁
13. 山下一夫「『封神演義』作者による神仙像の改変について：長耳定光仙と燃灯道人を中心に」、『藝文研究』第72号、慶應義塾大学藝文学会、1997年、39-61頁
14. 山下一夫「『封神演義』西方教主考」、『圓光佛學學報』第3期、1999年、241-259頁

15. 竹本寿光「過去四仏について」、『印度學佛教學研究』第28号、1979年、297-299頁
16. 李静杰「獅子吼觀音与三大士像考察」、『故宮博物院院刊』2022年第4期、2022年、4-19頁

